日蓮大聖人御書全集

そやにゅうどうどのもとごしょ

曽谷入道殿許御書

新版
1390
～
1410

曽谷入道殿許御書

文永12年('75)3月10日＊　曽谷教信・大田乗明

夫れ以んみれば、重病を療治するには良薬を構索し、逆謗を救助するには要法にはしかず。いわゆる、時を論ずれば正像末、教を論ずれば小大・偏円・権実・顕密、国を論ずれば中・辺の両国、機を論ずれば已逆と未逆と、已謗と未謗と、師を論ずれば凡師と聖師と、二乗と菩薩と、他方と此土と、迹化と本化となり。故に四依の菩薩等、滅後に出現し、仏の付嘱に随って、みだりに経法を演説した

まわず。

詮ずるところ、無智の者の、いまだ大法を謗ぜざるには、たちまちに大法を与えず、悪人たる上、すでに実大を謗ずる者には、強いてこれを説くべし。

法華経第二の巻に、仏、舎利弗に対して云わく「無智の人の中にして、この経を説くことなかれ」。また第四の巻に薬王菩薩等の八万の大士に告げたまわく「この経はこれ諸仏の秘要の蔵なり。分布してみだりに人に授与すべからず」等云々。文の心は、無智の者の、しかもいまだ正法を

謗ぜざるには、左右なくこの経を説くことなかれと。法華経第七の巻の不軽品に云わく「乃至遠く四衆を見ても、また故に往って」等云々。また云わく「四衆の中に、瞋恚を生じて心不浄なる者有って、悪口・罵詈して言わく『この無智の比丘は、いずこより来るか』と」等云々。また云わく「あるいは杖木・瓦石をもって、これを打擲す」等云々。第二・第四の巻の経文と第七の巻の経文と天地・水火なり。

問うて曰わく、一経二説、いずれの義に就いて、この経

を弘通すべき。

答えて云わく、私に会通すべからず。霊山の聴衆たる天台大師ならびに妙楽大師等、処々に多くの釈有り。まず一・両の文を出ださん。文句の十に云わく「問うて曰わく、釈迦は出世して踟躕して説かず。今はこれ何の意ぞ。造次にして説くは何ぞや。答えて曰わく、本すでに善有れば、釈迦は小をもってこれを将護し、本いまだ善有らざれば、不軽は大をもってこれを強毒す」等云々。釈の心は、寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の前四味の小大・権実の諸経、

四教八教の所被の機縁、彼らの過去を尋ね見れば、久遠・大通の時において純円の種を下ろせしかども、諸の衆、一乗経を謗ぜしかば、三・五の塵点を経歴す。しかりといえども、下ろせしところの下種、純熟の故に、時至って自ら繋珠を顕す。ただし、四十余年の間、過去にすでに結縁の者もなお謗の義有るべきの故に、しばらく権小の諸経を演説して根機を練らしむ。

問うて曰わく、華厳の時の別円の大菩薩、乃至観経等の諸の凡夫の得道は、いかん。

答えて曰わく、彼らの衆は、時をもってこれを論ずれば、その経の得道に似たれども、実をもってこれを勘うるに、三・五の下種の輩なり。

問うて曰わく、その証拠、いかん。

答えて曰わく、法華経第五の巻の涌出品に云わく「この諸の衆生は、世々より已来、常に我が化を受く乃至この諸の衆生は、始め我が身を見、我が説くところを聞き、即ち皆信受して、如来の慧に入りき」等云々。天台、釈して云わく「衆生は久遠に」等云々。妙楽大師云わく「脱は

現に在りといえども、つぶさに本種を騰ぐ」。また云わく「故に知んぬ、今日の逗会は昔の成就の機に赴くことを」等云々。経と釈と顕然の上は私の料簡を待たず。例せば、王女と下女と、天子の種子を下ろさずんば、国主とならざるがごとし。

問うて曰わく、大日経等の得道の者は、いかん。

答えて曰わく、種々の異義有りといえども、繁きが故にこれを載せず。ただし、詮ずるところ、彼々の経々に種・熟・脱を説かざれば、還って灰断に同じ。化に始め無きの

経なり。しかるに、真言師等、即身成仏を談ずるは、譬えば、窮人のみだりに帝王と号して自ら誅滅を取るがごとし。王莽・趙高の輩、外に求むべからず、今の真言家なり。これらは因みに論ぜしなり。

仏の滅後において三時有り。正像二千余年には、なお下種の者有り。例せば、在世四十余年のごとし。機根を知らずんば、左右なく実経を与うべからず。今は既に末法に入って、在世の結縁の者は漸々に衰微して、権実の二機皆ことごとく尽きぬ。彼の不軽菩薩、末世に出現して毒鼓を撃

たしむるの時なり。しかるに、今時の学者、時機に迷惑して、あるいは小乗を弘通し、あるいは権大乗を授与し、あるいは一乗を演説すれども、題目の五字をもって下種となすべきの由来を知らざるか。

ことに真言宗の学者、迷惑を懐いて三部経に依憑し、単に会二破二の義を宣ぶ。なお三一相対を説かず。即身頓悟の道、跡を削り、草木成仏は名をも聞かざるのみ。しかるに、善無畏・金剛智・不空等の僧侶、月氏より漢土に来臨せしの時、本国においていまだ存せざる天台の大法盛んにこの

国に流布せしむるのあいだ、自愛の所持の経弘め難きにより、一行阿闍梨を語らい得て、天台の智慧を盗み取り、大日経等に摂め入れて、天竺より有るの由これを偽る。しかるに、震旦一国の王臣等ならびに日本国の弘法・慈覚の両大師、これを弁えずして信を加う。已下の諸学は言うに足らず。ただ漢土・日本の中に伝教大師一人これを惟いたまえり。しかれども、いまだ分明ならず。詮ずるところ、善無畏三蔵、閻魔王の責めを蒙ってこの過罪を悔い、不空三蔵、天竺に還り渡って真言を捨てて漢土に来臨し、天台の

戒壇を建立し、両界の中央の本尊に法華経を置きしは、これなり。

問うて曰わく、今時の真言宗の学者等、何ぞこの義を存ぜざるや。

答えて曰わく、「**眉は近けれども見えず、自らの禍いを知らず**」とはこの謂いか。嘉祥大師は三論宗を捨てて天台の弟子となる。今の末学等、これを知らず。法蔵・澄観は華厳宗を置いて智者に帰す。彼の宗の学者、これを存ぜず。玄奘三蔵・慈恩大師は五性の邪義を廃して一乗の法に移

る。法相の学者、堅くこれを諍う。

問うて曰わく、その証、いかん。

答えて曰わく、あるいは心を移して身を移さず、あるいは身を移して心を移さず、あるいは身心共に移し、あるいは身心共に移さず。その証文は別紙にこれを出だすべし。

この消息の詮にあらざれば、これを出ださず。

仏の滅後に三時有り。いわゆる正法一千年。前の五百年には、迦葉・阿難・商那和修・末田地・脇比丘等、一向に小乗の薬をもって衆生の軽病を対治す。四阿含経と十誦・

八十誦等の諸律と相続解脱経等の三蔵を弘通して、後には律宗・倶舎宗・成実宗と号する、これなり。後の五百年には、馬鳴菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の諸の大論師、初めには諸の小聖の弘めしところの小乗経これに通達し、後には一々に彼の義を破失し了わって、諸の大乗経を弘通す。これまた中薬をもって衆生の中病を対治す。いわゆる華厳経・般若経・大日経・深密経等、三輪宗・法相宗・真言陀羅尼・禅法等なり。

問うて曰わく、迦葉・阿難等の諸の小聖、何ぞ大乗経を弘めざるや。

答えて曰わく、一には自身堪えざるが故に、二には所被の機無きが故に、三には仏より譲り与えられざるが故に、四には時来らざるが故なり。

問うて曰わく、竜樹・天親等、何ぞ一乗経を弘めざるや。

答えて曰わく、四つの義有り。先のごとし。

問うて曰わく、諸の真言師云わく「仏の滅後八百年に

相当たって、竜猛菩薩、月氏に出現して、釈尊の顕教たる華厳・法華等を馬鳴菩薩等に相伝し、大日の密教をば、自ら南天の鉄塔を開拓し、面り大日如来と金剛薩埵とに対してこれを口決す。竜猛菩薩に二人の弟子有り。提婆菩薩には釈迦の顕教を伝え、竜智菩薩には大日の密教を授く。竜智菩薩は阿羅苑に隠居して人に伝えず。その間に提婆菩薩の伝うるところの顕教、まず漢土に渡る。その後数年を経歴して、竜智菩薩の伝うるところの秘密の教を、善無畏・金剛智・不空、漢土に渡す」等云々。この義、い

かん。

答えて曰わく、一切の真言師かくのごとし。また天台・華厳等の諸家も一同にこれを信ず。そもそも、竜猛巳前には月氏国の中には大日の三部経無しと云うか。釈迦よりの外に大日如来世に出現して三部の経を説くと云うか。顕を提婆に伝え、密を竜智に授くる証文、いずれの経論に出でたるぞ。この大妄語は、提婆の虚誑罪にも過ぎ、瞿伽利の狂言にも超ゆ。漢土・日本の王位の尽き、両朝の僧侶の謗法となるの由来、専らこれに在らずや。しからば則ち、

彼の震旦既に北蕃のために破られ、この日域もまた西戎のために侵されんと欲す。これらはしばらくこれを置く。

像法に入って一千年、月氏の仏法漢土に渡来するのあいだ、前の四百年には、南北の諸師は異義蘭菊にして、東西の仏法いまだ定まらず。四百年の後、五百年の前、その中間一百年の間に、南岳・天台等、漢土に出現して、ほぼ法華の実義を弘宣したもう。しかれども、円慧・円定においては国師たりといえども、円頓の戒場いまだこれを建立せず。故に国を挙げて戒師と仰がず。六百年の已後、法相宗

西天より来れり。太宗皇帝これを用いるが故に、天台法華宗に帰依するの人漸く薄し。ここに就いて隙を得て、則天皇后の御宇に、先に破られし華厳また起こって、天台宗に勝れたるの由、これを称す。太宗より第八代玄宗皇帝の御宇に、真言始めて月氏より来れり。いわゆる、開元四年には善無畏三蔵の大日経・蘇悉地経、開元八年には金剛智・不空の両三蔵の金剛頂経、かくのごとく三経を天竺より漢土に持ち来り、天台の釈を見聞して智発して、釈を作って大日経と法華経とを一経となし、その上に印・真言を

加えて密教勝るるの由を号し、結句、権経をもって実経を下す。漢土の学者このことを知らず。

像法の末八百年に相当たって、伝教大師、和国に託生して、華厳宗等の六宗の邪義を糾明するのみにあらず、しかのみならず、南岳・天台もいまだ弘めたまわざる円頓戒壇を叡山に建立す。日本一州の学者、一人も残らず大師の門弟となる。ただし、天台と真言との勝劣と誑惑においては、知ってしかも分明ならず。詮ずるところ、末法に贈りたもうか。これらは、傍論たるの故に、しばらくこれを置

く。吾が師・伝教大師、三国にいまだ弘まらざるの円頓の大戒壇をば叡山に建立したもう。**これひとえに、上薬を持ち用いて衆生の重病を治せんとせる、これなり。**

今、末法に入って二百二十余年、五濁強盛にして三災しきりに起こり、衆・見の二濁国中に充満し、逆・謗の二輩四海に散在す。専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と恃怙し、謗法の者を尊重して国師となす。孔丘の孝経これを提げて父母の頭を打ち、釈尊の法華経を口に誦しながら教主に違背す。不孝国はこの国なり。勝母の閭、他境に求めず。

故に、青天は眼を瞋らしてこの国を睨み、黄地は憤りを含んで大地を震わす。去ぬる正嘉元年の大地動、文永元年の大彗星、これらの災夭は、仏の滅後二千二百二十余年の間、月氏・漢土・日本の内にいまだ出現せざるところの大難なり。彼の弗舎蜜多羅王の五天の寺塔を焼失し、漢土の会昌天子の九国の僧尼を還俗せしめしに超過すること百千倍なり。大謗法の輩国中に充満し一天に弥るによって起こるところの夭災なり。

大般涅槃経に云わく「末法に入って不孝・謗法の者、大地

微塵のごとし」取意。法滅尽経に「法滅尽の時は、狗犬の僧尼、恒河沙のごとし」等云々〈取意〉。今、親りこの国を見聞するに、人ごとにこの二つの悪有り。これらの大悪の輩は、いかなる秘術をもってこれを扶救せん。

大覚世尊、仏眼をもって末法を鑑知し、この逆・謗の二罪を対治せしめんがために、一大秘法を留め置きたもう。いわゆる、法華経本門久成の釈尊、宝浄世界の多宝仏、高さ五百由旬・広さ二百五十由旬の大宝塔の中において二仏座を並べしこと、あたかも日月のごとく、十方分身の諸仏は、

高さ五百由旬の宝樹の下に五由旬の師子の座を並べ敷き、衆星のごとく四百万億那由他の大地に列坐したもう。三仏の二会に充満したもうの儀式は、華厳寂場の華蔵世界にも勝れ、真言両界の千二百余尊にも超えたり。一切世間眼は、この大会において、六難九易を挙げて法華経を流通せんと諸の大菩薩を諫暁せしむ。金色世界の文殊師利、兜史多宮の弥勒菩薩、宝浄世界の智積菩薩、補陀落山の観世音菩薩等、頭陀第一の大迦葉、智慧第一の舎利弗等、三千世界を統領する無量の梵天、須弥の頂に居住する

無辺の帝釈、一四天下を照耀せる阿僧祇の日月、十方の仏法を護持する恒沙の四天王、大地微塵の諸の竜王等、我にも我にもこの経を付嘱せられよと競い望みしかども、世尊すべてこれを許したまわず。

その時に、下方の大地より未見今見の四大菩薩を召し出だしたもう。いわゆる上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩なり。この大菩薩、各々六万恒河沙の眷属を具足す。形貌・威儀、言をもって宣べ難く、心をもって量るべからず。初成道の法慧・功徳林・金剛幢・

金剛蔵等の四菩薩、各々十恒河沙の眷属を具足し仏会を荘厳せしも、大集経の欲・色二界の中間、大宝坊において来臨せし十方の諸大菩薩、乃至大日経の八葉の中の四大菩薩も、金剛頂経の三十七尊の中の十六大菩薩等も、この四大菩薩に比挍すれば、なお帝釈と猿猴と、華山と妙高とのごとし。

弥勒菩薩、衆の疑いを挙げて云わく「いまし一人をも識らず」等云々。天台大師云わく「寂場より已降、今座より已往、十方の大士来会して絶えず。限るべからずといえ

ども、我は補処の智力をもって、ことごとく見、ことごとく知る。しかるに、この衆においては一人をも識らず」等云々。妙楽云わく「今見るに皆識らざる所以は乃至智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。天台また云わく「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て池の深きを知る」云々。

例せば、漢王の四将の張良・樊噲・陳平・周勃の四人を、商山の四皓、綺里季・角里先生・園公・夏黄公等の四賢に比するがごとし。天地雲泥なり。四皓が為体、頭には

白雪を頂き、額には四海の波を畳み、眉には半月を移し、腰には多羅枝を張り、恵帝の左右に侍して世を治められたること、堯・舜の古を移し、一天安穏なりしこと、神農の昔にも異ならず。この四大菩薩もまたまたかくのごとし。法華の会に出現し、三仏を荘厳し、謗人の慢幢を倒すこと、大風の小樹の枝を吹くがごとく、衆会の敬心を至すこと、諸天の帝釈に従うがごとし。提婆が仏を打ちしも舌を出だして掌を合わせ、瞿伽利が無実を構えしも地に臥して失を悔ゆ。文殊等の大聖は身を慙じて言を出ださ

ず。舎利弗等の小聖は智を失って頭を低る。

その時に、大覚世尊、寿量品を演説し、しかして後に十神力を示現して、四大菩薩に付嘱したもう。その所嘱の法は何物ぞや。法華経の中にも、広を捨てて略を取り、略を捨てて要を取る。いわゆる、妙法蓮華経の五字、名・体・宗・用・教の五重玄なり。例せば、九方堙が馬を相するの法には玄黄を略して駿逸を取り、支道林が経を講ずるの法には細科を捨てて元意を取る等のごとし。

この四大菩薩は、釈尊成道の始め寂滅道場の砌にも

来らず、如来入滅の終わり抜提河の辺にも至らず。しかのみならず、霊山八年の間に、進んでは迹門序正の儀式に文殊・弥勒等の発起・影響の諸聖衆にも列ならず、退いては本門流通の座席に観音・妙音等の発誓弘経の大士にも交わらず。ただこの一大秘法を持って本の処に隠居するの後、仏の滅後正像二千年の間においていまだ一度も出現せず。詮ずるところ、仏専ら末世の時に限ってこれらの大士に付嘱せし故なり。

法華経の分別功徳品に云わく「悪世末法の時、能くこの

経を持たば」云々。涅槃経に云わく「譬えば、七子あり、父母平等ならざるにあらざれども、しかも病者において心則ちひとえに重きがごとし」云々。法華経の薬王品に云わく「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり」云々。七子の中に上の六子はしばらくこれを置く。第七の病子は、一闡提の人、五逆・謗法の者、末代悪世の日本国の一切衆生なり。

正法一千年の前の五百年には、一切の声聞、涅槃し了わんぬ。後の五百年には、他方より来れる菩薩、大体本土に還

り向かい了わんぬ。像法に入っての一千年には、文殊・観音・薬王・弥勒等、南岳・天台と誕生し、傅大士・行基・伝教等と示現して、衆生を利益す。

今、末法に入って、これらの諸大士も皆、本の処に隠居しぬ。その外、閻浮守護の天神地祇も、あるいは他方に去り、あるいはこの土に住すれども悪国を守護せず、あるいは法味を嘗めざれば守護の力無し。例せば、法身の大士にあらざれば三悪道に入らざるがごとし。大苦忍び難きが故なり。しかるに、地涌千界の大菩薩、一には娑婆世界に住す

ること多塵劫なり。二には釈尊に随って久遠より已来初発心の弟子なり。三には娑婆世界の衆生の最初下種の菩薩なり。かくのごとき等の宿縁の方便、諸大菩薩に超過せり。

問うて曰わく、その証拠、いかん。

法華第五の涌出品に云わく「その時、他方の国土の諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたるは乃至その時、仏は諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく『止みね。善男子よ。汝等がこの経を護持せんことを須いじ』と」等云々。

天台云わく「他方はこの土に結縁のこと浅し。宣授せんと欲すといえども、必ず巨益無からん」云々。妙楽云わく「なおひとえに他方の菩薩に付せず。あに独り身子のみならんや」云々。また天台云わく『八万大士に告げたまわく』とは乃至今の下の文のごときは、下方を召してなお本眷属を待つ。験らけし、余はいまだ堪えざること」云々。経釈の心は、迦葉・舎利弗等の一切の声聞、文殊・薬王・観音・弥勒等の迹化・他方の諸大士は、末世の弘経に堪えずというなり。

経に云わく『我が娑婆世界に自ずから六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り、一々の菩薩に、各六万恒河沙の眷属有り。この諸人等は、能く我滅して後において、護持・読誦し、広くこの経を説かん』と。仏これを説きたもう時、娑婆世界の三千大千の国土は、地皆震裂して、その中より無量千万億の菩薩摩訶薩有って、同時に涌出せり乃至この菩薩衆の中に、四導師有り。一に上行と名づけ、二に無辺行と名づけ、三に浄行と名づけ、四に安立行と名づく。その衆の中において、最もこれ上首・唱導の師なり」等云々。天台

云わく「これ我が弟子、応に我が法を弘むべし」云々。妙楽云わく「子、父の法を弘む」云々。道暹云わく「付嘱とは、この経をば、ただ下方涌出の菩薩のみに付す。何をもっての故にしかる。法これ久成の法なるに由るが故に、久成の人に付す」等云々。

これらの大菩薩、末法の衆生を利益したもうこと、なお魚の水に練れ鳥の天に自在なるがごとし。濁悪の衆生、この大士に遇って仏種を殖うること、例せば、水精の月に向かって水を生じ、孔雀の雷の声を聞いて懐妊するがご

とし。天台云わく「なお百川の応須に海に潮ぐべきがごとく、縁に牽かれて応生すること、またかくのごとし」云々。

慧日大聖尊、仏眼をもって兼ねてこれを鑑みたもう故に、諸の大聖を捨棄し、この四聖を召し出だして要法を伝うるなり。末法の弘通を定むるなり。

問うて曰わく、要法の経文いかん。

答えて曰わく、口伝をもってこれを伝う。

釈尊、しかる後、正像二千年の衆生のために宝塔より出でて虚空に住立し、右の手をもって文殊・観音・梵帝・

日月・四天等の頂を摩でて、かくのごとく三反して、法華経の要よりの外の広略二門ならびに前後の一代の一切経を、これらの大士に付嘱す。正像二千年の機のためなり。その後、涅槃経の会に至って、重ねて法華経ならびに前四味の諸経を説いて、文殊等の諸大菩薩に授与したもう。これらは捃拾遺嘱なり。

ここをもって、滅後の弘経においても、仏の所嘱に随って弘法の限り有り。しからば則ち、迦葉・阿難等は、一向に小乗経を弘通して大乗経を申べず。竜樹・無著等は

権大乗経を申べて一乗経を弘通せず。たといこれを申べしかども、わずかにもってこれを指し示し、あるいは迹門の一分のみこれを宣べて、全く化導の始終を談ぜず。南岳・天台等は、観音・薬王等の化身として、小大・権実・迹本二門、化導の始終、師弟の遠近等ことごとくこれを宣べ、その上に已今当の三説を立てて一代超過の由を判ぜること、天竺の諸論にも勝れ、真丹の衆釈にも過ぎたり。旧訳・新訳の三蔵も、あたかもこの師には及ばず。顕密二道の元祖も、あえて敵対にあらず。しかりといえども、広略

をもって本となして、いまだ肝要に能えず。自身これを存ずといえども、あえて他伝に及ばず。これひとえに付嘱を重んぜしが故なり。

伝教大師は、仏の滅後一千八百年、像法の末に相当たって、日本国に生まれて小乗・大乗・一乗の諸戒一々にこれを分別し、梵網・瓔珞の別受戒をもって小乗の二百五十戒を破失し、また法華・普賢の円頓の大王の戒をもって諸大乗経の臣民の戒を責め下す。この大戒は、霊山八年を除いて一閻浮提の内にいまだ有らざるところ

の大戒場を、叡山に建立す。しかるあいだ、八宗共に偏執を倒し、一国を挙げて弟子となる。観勒の流れの三論・成実、道昭の渡せる法相・倶舎、良弁の伝うるところの華厳宗、鑑真和尚の渡すところの律宗、弘法大師の門弟等、誰か円頓の大戒を持たざらん。この義に違背するは逆路の人なり。この戒を信仰するは伝教大師の門徒なり。「日本一州、円機純一なり。朝野・遠近、同じく一乗に帰す」とはこの謂いか。

この外は、漢土の三論宗の吉蔵大師ならびに一百人、

法相宗の慈恩大師、華厳宗の法蔵・澄観、真言宗の善無畏・金剛智・不空・恵果、日本の弘法・慈覚等の三蔵の諸師は、四依の大士にあらざる暗師なり、愚人なり。経においては、大小・権実の旨を弁えず、顕密両道の趣を知らず。論においては、通申と別申とを糾さず、申と不申とを暁らめず。しかりといえども、彼の宗々の末学等、この諸師を崇敬して、これを聖人と号し、これを国師と尊ぶ。今まず一を挙げんに万を察せよ。

弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論等に云わく「か

くのごとき乗々は、自乗に名を得れども、後に望めば戯論と作る」。また云わく「無明の辺域」。また云わく「震旦の人師等、争って醍醐を盗んで各自宗に名づく」等云々。釈の心は、法華の大法を華厳と大日経とに対して、戯論の法と蔑り、無明の辺域と下し、あまつさえ、震旦一国の諸師を盗人と罵る。これらの謗法・謗人は、慈恩・得一の三乗真実・一乗方便の狂言にも超過し、善導・法然の千中無一・捨閉閣抛の過言にも雲泥せるなり。六波羅蜜経を

じょうじょう　じじょう　な　う　のち　のぞ　けろん
む　みょう　へんいき　い　しんたん　にんし
とう　あらそ　だいご　ぬす　おのおのじしゅう　なな　とううんぬん　しゃく
こころ　ほっけ　だいほう　けごん　だいにちきょう　たい　けろん　ほう
あなど　むみょう　へんいき　くだ　しんたんいっこく　しょし
ぬすびと　の　ほうぼう　ぼうにん　じおん　とくいつ　さんじょう
しんじつ　いちじょう　ほうべん　きょうげん　ちょうか　ぜんどう　ほうねん
せんちゅうむいち　しゃへいかくほう　かごん　うんでい　ろくはらみつきょう
とう　まつ　ふくうさんぞう　がっし　わた　ごかん　とう

始めに至るまで、いまだこの経有らず。南三北七の碩徳、いまだこの経を見ず。三論・天台・法相・華厳の人師、誰人か彼の経の醍醐を盗まんや。また彼の経の中に、法華経は醍醐にあらずの文、これ有りや不や。しかるに、日本の東寺の門人等、堅くこれを信じて種々に僻見を起こし、非より非を増し、暗きより暗きに入る。不便の次第なり。

彼の門家の伝法院の本願たる正覚の舎利講の式に云わく「尊高なるものは不二摩訶衍の仏なり。驢牛の三身は車を扶くること能わず。秘奥なるものは両部曼陀羅の教えな

り。顕乗の四人も履を取ること能わず」云々。三論・天台・法相・華厳等の元祖等を真言の師に相対するに「牛飼いにも及ばず、力者にも足らず」と書ける筆なり。乞い願わくは、彼の門徒等、心在らんの人はこれを案ぜよ。大悪口にあらずや、大謗法にあらずや。詮ずるところ、これらの狂言は、弘法大師の「後に望めば戯論と作る」の悪口より起こるか。教主釈尊・多宝・十方の諸仏は、法華経をもって已今当の諸説に相対して、「皆これ真実なり」と定め、しかる後、世尊は霊山に隠居し、多宝・諸仏は各本土に

還りたまいぬ。三仏を除くの外、誰かこれを破失せん。

なかんずく、弘法の覧るところの真言経の中に、三説を悔い還すの文これ有りや不や。弘法既にこれを出ださず。末学の智、いかんせん。しかるに、弘法大師一人のみ、法華経を華厳・大日の二経に相対して戯論・盗人となす。詮ずるところ、釈尊・多宝・十方の諸仏をもって盗人と称するか。末学等、眼を閉じてこれを案ぜよ。

問うて曰わく、昔より已来、いまだかつてかくのごとき謗言を聞かず。何ぞ上古清代の貴僧に違背し、いずくんぞ

当今濁世の愚侶を帰仰せんや。

答えて曰わく、汝が言うところのごとくんば、愚人は定めて理運なりと思わんか。しかれども、これらは皆、人の偽言に因って如来の金言を知らざるなり。大覚世尊、涅槃経に滅後を警めて言わく「善男子よ。我が所説において、もし疑いを生ぜば、なお応に受くべからず」云々。しかれば、仏、なお我が所説なりといえども、不審有らばこれを叙用せざれとなり。今、予を諸師に比べて謗難を加う。しかりといえども、あえて私曲を構えず。専ら釈尊の遺誡

に順って諸人の謬釈を糾すなり。

夫れ、斉の始めより梁の末に至るまで二百余年の間、南北の碩徳、光宅・智誕等の二百余人、涅槃経の「我らことごとく邪見の人と名づく」の文を引いて、法華経をもって「邪見の経」と定め、一国の僧尼ならびに王臣等を迷惑せしむ。陳・隋の比、智者大師これを糾明せし時、始めて南北の僻見を破し了わんぬ。唐の始め、太宗の御宇に、基法師、勝鬘経の「もし如来、彼の欲するところに随って方便もて説かば、即ちこれ大乗にして、二乗有ることな

し」の文を引いて、一乗方便・三乗真実の義を立つ。この邪義、震旦に流布するのみにあらず、日本の得一、称徳天皇の御時、盛んに非義を談ず。ここに伝教大師、ことごとく彼の邪見を破し了わんぬ。

後鳥羽院の御代に、源空法然、観無量寿経の「大乗を読誦す」の一句をもって法華経を摂め入れ、還って称名念仏に対して「雑行・方便なり。捨閉閣抛せよ」等云々。しかりといえども、五十余年の間、南都・北京・五畿七道の諸寺諸山の衆僧等、この悪義を破ること能わざりき。予が

難破分明たるのあいだ、一国の諸人たちまち彼の選択集を捨て了わんぬ。「根露るれば枝枯れ、源乾けば流れ竭く」とは、けだし、この謂いなるか。

しかのみならず、唐の半ば、玄宗皇帝の御代に、善無畏・不空等、大日経の住心品の「如実一道心」の一句において法華経を摂め入れ、反って権経と下す。日本の弘法大師は、六波羅蜜経の五蔵の中に第四の熟蘇味の般若波羅蜜蔵において法華経・涅槃経等を摂め入れ、第五の陀羅尼蔵に相対して、「争って醍醐を盗む」等云々。これらの禍咎は、

日本一州の内、四百余年、今にいまだこれを糾明せし人あらず。予が所存の難勢、あまねく一国に満ち、必ず彼の邪義破られんか。これらは、しばらくこれを止む。

迦葉・阿難等、竜樹・天親等、天台・伝教等の諸大聖人、知ってしかもいまだ弘宣せざるところの肝要の秘法は、法華経の文赫々たり。論釈等に載せざること明々たり。生知は自ら知るべし。賢人は明師に値遇してこれを信ぜよ。罪根深重の輩は邪推をもって人を軽しめ、これを信ぜず。しばらく耳に停めよ。本意に付いてこれを喩さん。

大集経の五十一に、大覚世尊、月蔵菩薩に語って云わく「我が滅後において、五百年の中は解脱堅固、次の五百年は禅定堅固〈已上、一千年〉。次の五百年は読誦多聞堅固、次の五百年は多造塔寺堅固〈已上、二千年〉。次の五百年は我が法の中において闘諍言訟して白法隠没せん」等云々。

今、末法に入って二百二十余年、「我が法の中において闘諍言訟して白法隠没せん」の時に相当たれり。法華経の第七の薬王品に、教主釈尊、多宝仏とともに宿王華菩薩に語って云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に

広宣流布して、断絶して悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃茶等にその便りを得しむることなかれ」。大集経の文をもってこれを案ずるに、前の四箇度の五百年は、仏の記文のごとく既に符合せしめ了わんぬ。第五の五百歳の一事、あに唐捐ならん。したがって、当世の為体、大日本国と大蒙古国と闘諍合戦す。第五の五百に相当たれるか。彼の大集経の文をもってこの法華経の文を惟うに、「後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して」の鳳詔、あに扶桑国にあらずや。弥勒菩薩の瑜伽論に云わく「東方に小国有り。その中に、

ただ大乗の種姓のみ有り」云々。慈氏菩薩、仏の滅後九百年に相当たって、無著菩薩の請いに赴いて中印度に来下して瑜伽論を演説す。これ、あるいは権機に随い、あるいは付嘱に順い、あるいは時によって権経を弘通す。しかりといえども、法華経の涌出品の時、地涌の菩薩を見て近成を疑うのあいだ、仏、請いに赴いて寿量品を演説し、分別功徳品に至って地涌の菩薩を勧奨して云わく「悪世末法の時、能くこの経を持たば」。弥勒菩薩、自身の付嘱にあらざればこれを弘めずといえども、親り霊山会上に

おいて「悪世末法の時」の金言を聴聞せし故に、瑜伽論を説くの時、末法に日本国において、地涌の菩薩、法華経の肝心を流布せしむべきの由、兼ねてこれを示すなり。

肇公の翻経の記に云わく「大師・須利耶蘇摩、左の手に法華経を持し、右の手に鳩摩羅什の頂を摩でて授与して云わく『仏日西に入って、遺耀将に東に及ばんとす。この経典、東北に有縁なり。汝、慎んで伝弘せよ』と」云々。

予この記の文を拝見して、両眼滝のごとく、一身あまねく悦べり。「この経典、東北に有縁なり」云々。西天の月支

国は未申の方、東方の日本国は丑寅の方なり。天竺において「東北に有縁なり」とは、あに日本国にあらずや。遵式の筆に云わく「始め西より伝う。なお月の生ずるがごとし。今また東より返る。なお日の昇るがごとし」云々。正像二千には西より東に流る。暮月の西空より始まるがごとし。末法五百には東より西に入る。朝日の東天より出ずるに似たり。

根本大師、記して云わく「代を語れば則ち像の終わり末の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち

五濁の生・闘諍の時なり。経に云わく『なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや』。この言、良に以有るが故なり」云々。また云わく「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり。何をもってか知ることを得る。安楽行品の『末世の法滅せん時』なり」云々。この釈は語美しく心隠れたり。読まん人、これを解し難きか。

伝教大師の語は我が時に似て、心は末法を示したもうなり。大師出現の時は、仏の滅後一千八百余年なり。

大集経の文をもってこれを勘うるに、大師存生の時は、第四の多造塔寺堅固の時に相当たる。全く第五の闘諍堅固の時にあらず。しかるに、余処の釈に「末法はなはだ近きに有り」の言有り。定めて知んぬ、闘諍堅固の筆は我が時を指すにあらざるなり。

予つらつら事の情を案ずるに、大師、薬王菩薩として霊山会上に侍して、仏、上行菩薩出現の時を兼ねてこれを記したもう故に、ほぼこれを喩すか。しかるに、予、地涌の一分にあらざれども、兼ねてこのことを知る故に、地涌

大士に前立ってほぼ五字を示す。例せば、西王母の先相には青鳥、客人の来るには鴆鵲のごとし。

この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし。しからば則ち、予所持の聖教、多々これ有り。しかりといえども、両度の御勘気、衆度の大難の時、あるいは一巻二巻散失し、あるいは一字二字脱落し、あるいは魚魯の謬誤、あるいは一部二部損朽す。もし黙止して一期を過ぐるの後には、弟子等定めて謬乱出来の基なり。ここをもって、愚身、老耄已前にこれを

糾調せんと欲す。しかるに、風聞のごとくんば、貴辺ならびに大田金吾殿、越中の御所領の内ならびに近辺の寺々に数多の聖教あり等云々。両人共に大檀那たり。所願を成ぜしめたまえ。涅槃経に云わく「内には弟子有って甚深の義を解り、外には清浄の檀越有って仏法久住せん」云々。天台大師は毛喜等を相語らい、伝教大師は国道・広世等を恃怙す云々。

仁王経に云わく「千里の内に七難をして起こらざらしむ」云々。法華経に云わく「百由旬に諸の衰患無からしむ」

云々。国主、正法を弘通すれば、必ずこの徳を備う。臣民等、この法を守護せんに、あに家内の大難を払わざらんや。また法華経の第八に云わく「願うところは虚しからじ。また現世において、その福報を得ん」。また云わく「当に今世において現の果報を得べし」云々。また云わく「この人は現世に白癩の病を得ん」。また云わく「頭破れて七分に作る」。また第二の巻に云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」云々。第五の巻に云わく「も

し人、悪み罵らば、口は則ち閉塞せん」云々。

伝教大師云わく「**讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く**」等云々。安明とは須弥山の名なり。無間とは阿鼻の別名なり。国主、持者を誹謗せば位を失い、臣民、行者を毀呰せば身を喪ぼす。一国を挙げて用いざれば、定めて自反・他逼出来せしむべきなり。また上品の行者は大の七難、中品の行者は二十九難の内、下品の行者は無量の難の随一なり。また大の七難において七人有り。第一は日月の難なり。第一の内にまた五つの大難有り。いわゆ

る「日月度を失い、時節反逆し、あるいは赤日出で、あるいは黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕して光無く、あるいは日輪一重、二・三・四・五重の輪現ず」。また経に云わく「二つの月並び出でん」と。今この国土に有らざるは、二つの日、二つの月等の大難なり。余の難は大体これ有り。今この亀鏡をもって日本国を浮かべ見るに、必ず法華経の大行者有るか。既にこれを謗る者に大罰有り。これを信ずる者、何ぞ大福無からん。

今、両人、微力を励まし、予が願に力を副え、仏の金言

を試みよ。経文のごとくこれを行ぜんに徴無くんば、釈尊正直の経文、多宝証明の誠言、十方分身の諸仏の舌相、有言無実とならんか。提婆の大妄語に過ぎ、瞿伽利の大狂言に超えたらん。日月地に落ち、大地反覆し、天を仰いで声を発し、地に臥して胸を押さう。殷の湯王の玉体を薪に積み、戒日大王の竜顔を火に入れしも、今この時に当たるか。

もし、この書を見聞して宿習有らば、その心を発得すべし。使者にこの書を持たしめ、早々に北国に差し遣わし、

金吾殿の返報を取って、速々是非を聞かしめよ。この願もし成ぜば、崑崙山の玉鮮やかなるは求めずして蔵に収まり、大海の宝珠は招かざるに掌に在らん。恐惶謹言。

下春十日

日蓮　花押

曽谷入道殿

大田金吾殿